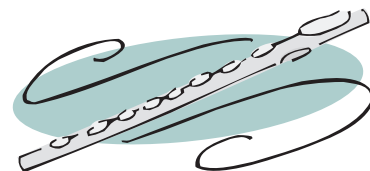


# プログラムノート



## ・テレマン／ソナタへ短調

ドイツバロックを代表する作曲家の一人である G.F.テレマン (1681~1767) は、宮廷および教会の楽長、ハンブルグ市の総音楽監督も務めた。作品は室内楽、管弦楽、オペラ、宗教音楽と多岐にわたり、その数もカンタータだけで1700曲を超えるなど多作である。

この「ソナタ」はTriste、Allegro、Andante、Vivaceの四楽章からなる。Tristeは"悲しく"と解釈される事が多いようだが、私はそれよりもさらに積極的な"嘆き"のような印象を抱いている。伴奏のアルペジオは、吟遊詩人の"たて琴"をイメージしてお聞きいただきたい。Vivaceでは、Tristeの最初のモチーフがキャラクターをかえて再登場する。ここではTristeでのそれに対し、動的な気持ちの転換を表現するため、意図的にヘミオレを強調して演奏するつもりである。「逆境をバネに飛躍する」ようなメッセージを受け取っていただければ幸いである。

## ・ドニゼッティ／ソナタ

G.ドニゼッティ (1797-1848) は、ロッシーニ、ベリーニと共に19世紀前半のイタリアオペラを代表する作曲家。

この「ソナタ」も、ドニゼッティの作品らしくメロディックで親しみやすい。導入部のLargoは、運命を象徴するような断定的なコード進行と、それに続くアリアを思わせるようなカンタービレとの対比が面白い。Allegroでは調性も拍子も一変し、軽快でリズムミク展開となる。

## ・クーラウ／序奏とロンド

F.クーラウ (1786-1832) ベートーベンと同じ頃に活躍したドイツの作曲家。ピアノのメロード作品とフルート作品が多く「フルートにおけるベートーベン」と呼ばれていた。クーラウは、自身がフルートの演奏家でもあり、楽器としてのフルートの性質を熟知した上で、それに対して少なからぬインスピレーションを感じていたようだ。

この「序奏とロンド」は、テクニカルな部分も含めて、フルートの魅力を引き出しやすい作品で、クーラウ自身が、フルートに対してどのような印象を持っていたのかをいうかがい知事ができる。私はこの曲に切ない恋心のようなメランコリックなイメージを抱いている。その部分を上手く表現できれば幸いである。

## ・弘田龍太郎／浜千鳥

故J.P.ランパル氏の編曲による「浜千鳥」を「日本のうた」として選曲した。氏は日本のフルート界に多大な影響を与えた一人である。

この曲は、もともとは誰もが良く知る「日本のうた」であるが、調性といい、フラッタータンギングが登場するなどの技術的な部分といい、明らかに「フルート」を意識した編曲である。

## ・シューベルト／しぼめる花の主題による変奏曲

F.シューベルト (1797-1828) は、ドイツ・ロマン派初期のオーストリアの作曲家。600曲以上のドイツ歌曲 (Lied) を残し「ドイツ歌曲の王」と称されている。この曲のテーマである「しぼめる花」は、ミュラーの詩による彼の晩年の歌曲集「美しき水車屋の娘」の中の一つ。ドイツリートを代表する叙情的で美しい曲だが、その詞のテーマは、恋愛、失恋、自殺と、その美しさからは想像もつかないような、せつない物語を含んでいる。

この変奏曲は、葬送行進曲を思わせる重々しい導入に続き、悲しみが頂点を極めるがごとく、フルートが急激な2度の上行形を奏した後、思い出に浸るように、時に葛藤し、時に我に返りながらテーマに向かう。この曲はバリエーション形式ではあるものの、各々において物語がある。例えば第三変奏では、主人公の若者が、恋人であった水車屋の娘と手に手を取り、柔らかな陽の光のもと、花畑を散策する情景が目浮かぶようだ。

この曲は、先日亡くなられた江頭大二氏から、私がレッスンを受けた最後の曲となった。レッスンも半ばで、宙に浮いたままになっていたこの曲に、私からの想いを込めて天国の先生に捧げる。